

素謡・連吟・独吟曲目の概略

「鶴亀（つるかめ）」 唐の天子が年始めの年賀で百官卿相・群衆の拝賀を受け、恒例により長生を祈る鶴亀の舞楽を舞わせる。天子も興に乗り一指し舞い、神輿で還御する。

「羽衣（はごろも）」 白龍という漁夫が三保の松原で松に懸った美しい衣を見つけ、家の寶にと取って帰ろうとする。天人が現れ私の羽衣でそれがないと天に帰れないと返却を願う。やり取りの末、天人は羽衣を著し約束の舞楽を舞い富士を背景に天上に戻る。

「半菰（はじとみ）」 京の雲林院の僧が立花の供養をしていると里女が現れ花を添えるので何の花かと問うと「夕顔」と言い去る。僧が五条に夕顔の咲く家を訪ね源氏物語の昔を偲んでいると、夕顔の霊が半菰を押し上げ立ち出で源氏との縁を語り明け方に消え去る。

「井筒（いづつ）」 廻国の僧が奈良石上の在原寺に立ち寄ると一人の女が現れ、問いかけると業平と紀有常の娘との筒井筒に絡む縁を語り、最後にその女だと名乗り隠れ去る。夜半女の霊が僧の夢の中に現れ業平の形見の冠直衣を着て舞いを舞い、寺の鐘で夢が覚める。

「江口（えぐち）」 旅僧が淀川を下り江口の里に着き、かつて西行法師が宿の主に宿泊を断られた時の和歌を口ずさむと、女が現れ出家故に泊めなかったと姿を消す。夜半江口の君を弔うと船に姿を現し仏法を説き舞い、普賢菩薩に変身し白象に乗り西空に去る。

「小袖曾我（こそでそが）」 曾我兄弟は源頼朝の富士の巻狩を機に父の敵工藤祐経を討とうと決心し母に暇乞いに行くが、母は勘当していた弟五郎時致に会おうともせず重ねて勘当。そこで兄の十郎祐成が真意を話すと勘当を許し、祝杯の後兄弟は御狩場を目指す。

「富士太鼓（ふじだいこ）」 萩原院の御時管弦の会に浅間という楽人が召されたが、住吉の富士もこれを望み上洛したので浅間が殺してしまう。富士の妻が不吉な夢を見て娘と上洛し討たれたと形見を渡され、乱心して何事も太鼓のせいだと、敵は太鼓と打ち鳴らす。

「弱法師（よろぼし）」 河内の高安通俊は讒言により息子を追放したが、不憫に思い聖徳太子建立の四天王寺で施行していると乞食が盲目でよろよろ歩くのに出会う。子は梅下で施行を受け日想観で法悦も味わい、夜半の名乗り合いで親子が確認され父は連れ帰る。

「菊慈童（きくじどう）」 魏の文帝の臣下がある山の薬の湧き水を見て参れとの宣旨で山に着くと童子が出現、問うと周の穆王に仕えたと言うので七百年経ており帝が授けた枕の二句の偈が菊水に与えた効験と解る。童子は帝の聖徳を讃え霊水を口にし仙家に消え入る。

「實盛（さねもり）」 遊行上人が加賀で説法していると毎日聴聞に来る老翁がいて、問いに齋藤實盛の幽霊であり成仏できないと答え池に失せる。上人が夜もすがら回向すると甲冑姿の實盛が現れ髪を染めての木曾義仲軍との戦いの顛末を語り、念仏の弔いを頼む。

「土蜘蛛（つちぐも）」 病臥中の源頼光の許に小蝶が見舞いに来る。深更に及び僧形が現れその名を問うと蜘蛛の姿になり千筋の絲を投げかけ、枕許の刀で斬りつけると消え失せる。物音で獨武者が駆け付け流れた血を追跡し塚に辿り着き、土蜘蛛の精霊を討ち取る。